

黒田官兵衛と連歌

富田 志津子

はじめに

平成二十六年の姫路は、「官兵衛」で沸いた。念願の大河ドラマで「軍師 官兵衛」がとりあげられたからである。電車やバスの車体には、官兵衛の姿が描かれ、姫路駅前の大通りには「官兵衛」の幟がはためく。

筆者は、本学に務めるまで、黒田官兵衛というと、羽柴秀吉の参謀で、九州の黒田家のご先祖、という程度の知識しか持っていなかった。播磨の大学に勤務するようになり、祭りには「官兵衛」の行列が通り、NHKへのドラマ化の要請運動を知って、彼が姫路の生まれであることを認識したのである。そのような私に、官兵衛を語る資格はない、実際、ドラマで見る以上の史実は知らなかった。

ところが、あるとき、兵庫県伊丹市の柿衛文庫の小企画展「戦国武将と連歌・茶の湯」を見て、官兵衛が連歌師と関わりを持っていたことを知った。さらに同館の館長より官兵衛の巻いた連歌があることをご教示いただき、兵庫県立博物館で開催されている「軍師 官兵衛」展を観に行ったのである。刀や鎧兜、武士の肖像などが多い中、たしかに、それはあった。和歌短冊や和歌の詠草懐紙とともに、太宰府天満宮に奉納した連歌百韻、その控え、京の貴顕と一座した巻などが展示されていた。その後、調べて見ると、官兵衛（如水）は、連歌を嗜み、一流の連歌師と交流し、太宰府天満宮に連歌屋を再興していることもわかった。

戦国武将は戦ばかりしてわけではなく、文事をも好んだ。官兵衛もその一人である。彼らが茶の湯を嗜んだことは、よく知られているが、連歌となると、一般的にはあまり知られていない。私自身は連歌について門外漢であり、先学の調査研究に頼るところが大きいですが、姫路で官兵衛が注目されている今、官兵衛の連歌についてとり上げてみたいと思う。

一 戦国武将と連歌

室町期、政治力や経済力をつけてきた地方の武将たちは、学問、文化を求めた。彼らは、みずからの人格形成のため、また家臣や領民の尊敬を受け、領地を安定化させるためにも、教養が必要であった。和歌、漢詩漢文、連歌などが求められ、その中で、室町時代は連歌の時代であり、連歌が注目をあびていたようである。

しかし、連歌には煩瑣な式目（規則）があり、独学は難しい。また、座（複数の人の集まり）を必要とし、多くのしきたりがある。そのため、一座を捌き、煩瑣な式目に精通している人が必要で、「連歌師」という職業が生まれた。連歌師は、種々の文化、つまり座敷の設備（座敷飾り）、茶や香などの接待法にも詳しく、また、連歌が古典文学を基盤にするところから、『古今和歌集』や『源氏物語』にも精通していた。

連歌の流行した南北朝には、遁世僧の中に、連歌指導を専門とする者があらわれ、やがて、飯尾宗祇が出て「連歌師」と称するにふさわしい生活の一道を形成する。草庵に門弟を抱え、古典の講義をし、大名、高家をまわって連歌を張行したのである。

室町から戦国時代の連歌師は、多くが諸国を旅した。地方の武将の招きを受け、連歌の指導をするためである。武将らが渴望していた文化を一身に担って自分たちのところへ来てくれる者、それが連歌師であった。たとえば宗祇は、関東、北陸などの武将を歴訪し、応仁の乱の後は、中国、九州も廻っている。連歌師がいたからこそ、戦国武将は連歌を楽しむことができたといえよう。

一方、戦国時代の武将にとって、連歌は、戦乱に明け暮れる日常の慰め、であったが、連歌会と称して一族を集め結束をかためるためのものであった。また、一室での張行は謀議の場ともなった。連歌は、複数の連衆で張行することを前提にしているので、連歌の場に人々が集まっても不思議ではない。そこでは、心のつながりはもちろん、おたがいの情報の交換があった。

多くの連歌師は僧体をしていた。僧は社会的身分の外に置かれており、俗世に関わりがない。ということとは、建前たてまえは自由な身であり、敵味方に区別されることはない。戦乱の続く時代、連歌師は、連歌を各地に広め指導するためだけに、大名の使者として、あるいは、情報収集者としての役割も担ったのである。

こうして連歌師は、戦国大名と密接に結びついた。連歌師なくしては、連歌張行は不可能であったし、戦国武将にとつて、連歌師の語る他国の話は大切な情報であった。その中で、里村紹巴は、連歌師としてとくに戦国武将との関係が深かった人である。三好長慶、細川藤孝（幽斎）、豊臣秀吉、明智光秀、黒田如水（官兵衛）らと関係を持ち、とりわけ明智光秀が戦勝祈願で張行した「愛宕百韻」は有名である。これにより彼は、本能寺の変に荷担したと秀吉から嫌疑をかけられ、また後年、秀次との親近性をとがめられ、三井寺に一時、蟄居している。しかし、やがて許され、秀吉没後は、官兵衛との交流が頻繁である。官兵衛の連歌は、紹巴とその門人、紹宅らによって指導されたと考えてよいであろう。

二 官兵衛と連歌

軍師としての官兵衛の活躍は広く知られるところであるが、彼が連歌を嗜んだことはあまり知られていない。まず『連歌事典』（廣木一人編、二〇一〇年、東京堂出版）を引くと次のように書かれている。

如水・武家。黒田。天文十五年（一五四六）〜慶長九年（一六〇四）。孝高。現福岡県、筑前国福岡藩の基盤を築いた。中年の頃より文事を好み、天正十八年には息、長政や紹宅（富田注、肥後国木山城主、黒田如水に仕え、連歌に長じていた）らと連歌「何道百韻」を張行している。慶長年間になると、細川幽斎、紹巴、昌叱らとの一座が頻繁に見える。慶長六年には所領内の太宰府天満宮の傍らに一時寓居し、天満宮別当、大鳥居信岩と交流を深め、紹宅の子、紹印を祖として連歌屋を設立、天満宮連歌を再興するとともに、後の福城松連歌（富田注、福岡城で城主黒田家の正月連歌として行われた）の基盤を作った。

ここにあるように、官兵衛（以後、「如水」とする）が連歌に一座するようになったのは中年の頃からである。棚町知弥氏に「黒田如水の連歌」（『近世文芸 資料と考証』五 一九六六年）という如水の連歌に関する詳細な論考がある。それによると、官兵衛の一座する連歌の初見は、天正十八年八月、四十五歳の時である。官兵衛は、天正十五

年に秀吉より豊前国十二万石を封ぜられており、同十七年長政に封を譲り、如水と改名している。初見の連歌は、その翌年のものである。それは、豊前中津城竣工祝賀の連歌会として、孝高（如水）発句、長政脇、紹宅第三で、以下、一巡十三句を『黒田如水伝』に載せているという（筆者未見）。紹宅は、肥後国木山城主であったが、後に如水に仕え、太宰府天満宮連歌屋の開祖となった紹印の父である。紹巴の門人であった。その後の如水は、京において、細川幽齋らと連歌の交遊をもっている。

文禄三年、如水は秀吉の逆鱗にふれ、剃髮して円清と名乗る。その後、如水の連歌への傾倒が高まる。慶長二年から京の連歌壇に彼の名がしばしば登場し、没するまでの七年間、連歌に力を注いでいることがわかる。文雅をともしるのは、細川幽齋のほか、東条紀伊守行長、日野輝賢、飛鳥井雅庸、連歌師は、里村紹巴、同昌叱、同昌琢など。詳細は、前掲、棚町氏の論考を参照されたい。

三 官兵衛の「夢想之連歌」

如水が連歌を好み、京の貴顕と度々一座していたことは前述したが、ここにとりあげるのは、九州で慶長七年正月に巻かれた「夢想之連歌」百韻である。「はじめに」で述べたように、姫路市で開催された「軍師 官兵衛」展に出品されていたもので、太宰府天満宮に奉納された巻、またそれと同じ巻が清書されて黒田家にのこされ現在は福岡市博物館の所蔵になっており、それも同じ展覧会に出されていた。両者とも同展覧会の図録に色刷りの写真が載っている。天満宮に奉納された一巻は、梅の地模様紙に清書されており、図録の写真は、端作から表八句、そして名残裏八句と句上（連衆名と句数）が掲載されている。一方、福岡市博物館のものは、端作から二ノ折表までの三十六句が掲載されている。本稿では、太宰府天満宮奉納の図録掲出部分つまり初表（初オ）と名残裏（名ウ）の句、さらに福岡市博物館蔵の巻の初裏（初ウ）と二ノ折表（二オ）の句、全部で四十四句の翻刻と注釈を試みた。なお、天満宮奉納百韻一巻の翻刻は、棚町知弥氏が『近世文芸 資料と考証』四（一九六五年）に「福城松連歌」の「資料五」として載せている。

この百韻が詠まれた背景は、慶長五年十一月、関ヶ原の戦いのあと、黒田長政は、徳川家康から筑前国五十二万石

に封せられた。その年、如水と長政は、筑前国に入る。いったんは、小早川隆景の築いた名島城に入るが、翌年四月から新しい城を築き始めた。場所は、福崎の丘陵で、商人の町博多に隣接している。その城を、黒田家先祖の地、備前福岡にちなんで、福岡城と名付け、その地を福岡とした。

如水は、築城の間、太宰府天満宮の境内に隠宅を構え、寓居する。そのことにより、彼の天神崇敬や、太宰府天満宮別当の大鳥居信岩との雅交、連歌への執心などが、うかがわれる。如水はこのあと、天満宮に連歌屋を再興し、連歌師紹印（紹宅の子）を初祖とし三十石を与えた。こうして、太宰府天満宮の福城松連歌（黒田家の正月の連歌初め）が始められることになる。

慶長七年正月十六日に巻かれた「夢想之連歌」は、太宰府天満宮内に住んでいた如水が天神の神託を得、一族と共に巻いたものである。場所は如水宅と思われる。「夢想之連歌」自体は珍しいものではない。神仏により示された句を発句、もしくは発句と脇として張行するもので、宗祇以来先例がある。

如水に示された天神のご神託は「松むめや末ながかれとみどりたつ 山よりつゞくさとはふく岡（正月の松や梅にも縁が萌え、末永かれとめでたいことである。山より続くこの里は、福岡と名付けるがよい）」という和歌であった。これが「福岡」の地名の由来になる。この和歌を、連歌の発句と脇に分け、そのあとに付ける連歌の連衆は、円清（如水）、幸円（如水妻光）、長政（黒田家当主）、御上（長政妻榮）、松寿丸（如水甥）、御菊丸（長政長女菊）、までが黒田家一族である。信岩（太宰府天満宮別当）、紹印（連歌師、後の連歌屋主）、実右（連歌師、里村紹巴の弟子）のほかは、空与は、のちの福岡の智福寺の住職で中津から如水に従って入国した僧。古庵は母里古庵、真斎は井出真斎で如水のお伽衆、正重は勾当坊政重、良乗は花台坊で、これもお伽衆か。清重は黒田家の近臣と思われる。一句しか付けていない信生については不明。

円清以外の黒田家一族の者は、一句ずつしか付けていないが、これは筑前国黒田家の始まりと、福岡の地名の由来を示し、家と国とを言祝ぐ、重要な一卷である。如水は、この二年後に京都伏見で没した。彼が一族と巻いた連歌は、この一卷のみとなった。

さて、前述のように、本論では、初才と名ウは天満宮奉納の一卷、初ウと二才は控えの一卷を底本として、注解していく。解にあたって、式目についてはあげていない。句の季節と、花の句・月の句・恋の句を指摘し、前句と付句

が作りだす世界を説明するのみにとどめた。参考として、寄合語（付合語）を、『連珠合璧集』（一条兼良編）によって探し、季語の下に「」に入れて記している。また、便宜上、句に番号を付した。旧字体の漢字は常用になおし、必要なものには、濁点とふりがなを付した。

慶長七年正月十六日

夢想之連歌

① 松むめや末ながかれとみどりたつ

② 山よりつゞくさとほふく岡

春（梅）

如水が夢で天神から示されたとする。和歌の形であったので脇句に季がないが、脇句も春。松も梅も新しく緑が萌え、末永かれとめでたい。そんな山から続いているこの里は、福の岡、「福岡」である。天神の梅と黒田長政の幼名松寿丸から松を詠み込み、「福岡」の地名を定めて、その将来を言祝いでいる。

③ 朝夕のけぶりもかすむ浦はにて

円清

春（霞） 「朝日トアラバ・里」「芦屋トアラバ・里」

山より続くこの福岡の里は、一方は海になっており、漁師の家がある。豊かで、朝夕には窟の煙が立ちのぼり、それは、春霞とともに霞んで見える。朝夕の煙は、仁徳天皇の「民の窟はにきはひにけり」（『新古今集』等）の和歌が有名で、人々の生活が豊かであることを示す。また、煙と霞は、和歌では「春の色はわきてそれともなかりけり 煙りぞかすむ塩窟の浦」（知家『新後拾遺集』）のように、共に霞んで見分けがつかないものとして詠まれている。第三句としては、山里から海辺へ、景を転じている。山を背後に、前に海の広がる豊かな地、福岡がそこにある。

④長閑に風のかよふ江の水

幸円

春(長閑) 「霞トアラバ・風のどかなる」

浦も江も同義である。春の入江には、のどかに春風が吹いおり、漁師の家は霞んで見える。平和な春の風景である。「君住めばのどかにかよふ松風に ちとせをうつす庭の池水」(源具親『統後撰集』)の和歌の「君住めば」のような境地があるだろう。

⑤まさごちにつもれる雪や消ぬらん 長政

春(雪消) 「浜トアラバ・まさごち」

浜に春が来て、春風が吹き始めると、砂の上に積もっていた雪も融けてしまったようだ。源俊頼に「山里はつもれる雪のいつしかと 消えぬややがて春の初花」(『新拾遺集』)のような和歌もあり、雪が消えればやがて春が来る。自分たちが統治することになり、もうこの国の憂いは消えて行くだろう、という統治者としての裏の意もふくむか。

⑥こゝにかしこに苔の生そふ

御上

雑

一句の季は雑、前句に付くと、春の庭の景になる。真砂と苔の枯山水の庭園風景か。雪が融け始めると、あちらこちらに苔が見えるのである。新しい時がやって来る。

⑦雲はる、槇の葉伝ひ月みえて

松寿丸

秋(月) 月の句

「年つもるをすての山の槇の葉も 久しく見ねば苔おひにけり」(柿本人丸『統古今集』)と、槇の葉に苔が生うと古歌に詠まれている。ここは、雲が晴れると、苔むした槇の向こうに、葉を伝うように月が美しく見える、とする。この時、松寿丸は十三歳、翌年死去している。

⑧霧はふもとのみねのはるけさ 御菊丸

秋(霧) 「楨トアラバ・霧立のぼる」

楨の木の山の麓には霧がたっている。はるかな峰には、月がかかる。近景から遠景に転じられている。「村雨の露もまだひぬ楨の葉に 霧立ちのぼる秋の夕暮れ」(寂連『新古今集』)、「みねの雲ふもとの霧も色くれて 空も心も秋の松風」(定家『玉葉集』)と、和歌で常套的に詠まれる世界がそこにあるといえる。御菊は六歳。

ここまでが、黒田家一族の句である。連歌の表八句は序破急の序で、穏やかに詠むべきとされており(『筑波問答』)、ここでも、もっぱら風景、それも、静かで平和な里や美しい庭園の景が詠まれている。本歌取りとまではいえないにせよ、どれも和歌世界で詠まれる詞と景色を取り込んだものである。如水は別として、黒田一族の者にどれほど連歌の素養があったのか、とりわけ六歳の御菊に付合は無理であろう。当然、連歌師紹印らの助けを借りて、この表八句はできあがっていると思われる。

しかしともかくも、黒田家一族に詠まれたこの表八句は、天神神託として「福岡」の地の命名もふくめて、これから黒田家の所領となる地と自分たちの城への、愛着と、平穩無事の将来への願いが籠められていると思われるのである。

次、初ウからは黒田家一族は、円清をのこして退き、他の連衆の付合になる。略解すると以下のようになる。

⑨さをしかやかかへるさになる声ならん 紹印

秋(小男鹿) 「かせぎ(鹿)トアラバ・山」

男鹿が山へ帰るのか、妻を呼ぶ声が聞こえる。山の麓はさぞ霧が深かろう、初ウになってようやく、生き物が出てくる。

⑩明はなれたる野辺のすゑト 信岩

雑 「すがる(鹿)トアラバ・野」

すっかり夜があけた野を男鹿が帰っていく。野の末々まで鹿の声が響き渡る。山の麓から野の景に転じている。

⑪かた／＼は沢のながれの水すみて 古庵

雑 「沢トアラバ・野」

野辺には沢があり、方々へ澄んだ水が流れて行く。

⑫田のものはらの道かすかなり 江青

雑 「沢トアラバ・田」

「田のもの」は「田の面」である。田がずっと続き、道の末はかすかにしか見えない。そこには、あちこちに澄んだ沢水がある。野の風景から田の風景へ転じた。

⑬くれそむる籬の霜のむら／＼に 真斎

冬（霜） 「籬トアラバ・田」

夕暮れ時の農村の風景。田ははるかに続き、農家の籬には、霜が所々置いている。

⑭冬までのこるはなのしら菊 実右

冬 「籬トアラバ・菊」「菊トアラバ・霜」

家の庭の白菊は冬猶残って咲いている。籬には、もう霜が置いているのに。農村から離れて、庭の風景へ転じた。

⑮おくは猶山の雫やふか／＼らし 正重

雑 「菊トアラバ・山路」

山路ではさぞ樹木の雫が深いだろう。白菊の花も、誰にも見られることなく、冬まで残っているにちがいない。庭の菊から山路の菊となる。

⑯涼しきまゝのかけはしの末 良乗

夏（涼し） 「梯トアラバ・・嶺」

梯の向こうは、山の奥である。樹木のしただりが深く、さぞ涼しからう。

⑰月うつる滝つ川波をとそひて 清重

秋（月） 月の句 「梯トアラバ・・谷」

滝つ川は急流のこと、滝つ波は、激しく波立つ流。梯の下は急流が音を立てて流れ、そこには月が映っている。

⑱秋のしぐれのふりめぐる空 空与

秋 「時雨トアラバ・・月を待、川音」

初時雨が降ったり止んだりする空模様、月が川に映り、川の流れに時雨の音が添う。

⑲をちかたの雲冷じく立まよひ 信生

秋（冷じ）

時雨の空は、遠くに雲が激しく立ち流れている。川の風景から空の風景へ転じた。

⑳野分の後やなびく草むら 円清

秋（野分） 「野分トアラバ・・風さはぎ村雲まよふ夕にも（後略）源氏野分」

野分の後、遠くの空には、まだ雲が立ち迷っている。草むらは、一方へなびいたままだ。時雨の空から野分の空へ。『連珠合璧集』で引く『源氏物語』の影響があるか。

㉑はなをみし梢も今はまばらにて 信岩

春（花） 花の句

一句では、花の散った後の梢を詠み春。前句とともに見ると、野分の後の、花も葉の散り果てた樹木の景となる。

②春のひかりのさしのこる庭

古庵

春

前句に付いて晩春の庭の風景。花は散って梢にまばらだが、まだ春らしい日影が庭に射し込んでいる。

③朝まだきさへづるとりのかずくに 江青

春（鳥の囀り） 「庭トアラバ・あした」

春の早朝、庭には朝陽が射し、鳥たちが囀る。

④すゑ葉そよめく露のわか竹

真斎

夏（若竹）

早朝の竹藪、若竹の葉末には露がおき、様々な鳥が囀る。庭から竹藪に転じた。

⑤を舟引つゝみ伝ひの雨過て

実右

雑 「露トアラバ・雨之類」「船トアラバ・一葉」

雨の中、小舟を堤に添って上流へ引いていく。前句に付くと、五月雨の頃の風景になる。堤には竹が生えている。

⑥はしのとだえをこゆるさゞなみ

正重

雑 「橋トアラバ・舟」

舟を曳いていくと、川が増水して、橋の上にさざなみがたっている所がある。

⑦日かけながら岩ま岩まのうす水

良乗

黒田官兵衛と連歌

冬（薄氷）

岩間の日陰には薄氷が張っている。前句は山川の橋か。

⑳ ゆきもさむき山ぎはの道

清重

冬（寒き） 「巖トアラバ・山」

旅人か里人か、山際の道を行く人。あたりは寒く、岩間には薄氷がみえる。

㉑ ふるまゝにかりばにつゞく雪の色

空与

冬（雪） 「雪トアラバ・こしちの山」

雪は降り続け狩場まで積もっている。猟師がそこを歩いて行く。

㉒ いばひ出たる駒ぞあしとき

紹印

雑

前句の猟師が転じて、馬に乗り鷹狩りに出る武者となる。馬は嘶き、雪の中を狩り場へと駆けていく。このあたり、句の展開が上手である。

㉓ 行かひもしげくなりぬる関むかへ

円清

雑

関迎えは、人を関まで迎えること。殿様のご帰還か、関迎えする人で関は行き交いが多い。前句は前駆の武者であらう。

㉔ まじはる袖は杉むらのかげ

信岩

雑 「関トアラバ・杉むら、恋」

関まで迎えに来てくれた人と杉の木陰で袖を交わす。どこか、恋を思わせる句である。

③ 神がきのめぐりのはなのさき初て 古庵

春(花) 花の句 「袖トアラバ・・牆」

杉むらから神社を連想して付けた。神社の神垣のまわりには花が咲き初め、人で賑わっている。杉むらにも人が行き交い袖を交わす。

④ わくる布留野のかすむ明がた 江青

春(霞む) 「籬トアラバ・・霞」

布留は布留の社(石上神社)のある地。春、人が神社へ参詣する明け方、花は咲き初め、野は一面霞んで見える。

⑤ 月にしもかへす田づらやひろがらん 真斎

春(田返し) 月の句

明け方、有明の月のもとで田返しをする。布留野の春の風景。

⑥ 春の水ゆくすゑはるかなり 実右

春

田面を流れる水は、遙か遠くまで続いている。前句に付くと、夕月夜のもと、田で働く人々の風景となる。

(中略)

⑦ のこる夜や鳥の声よりしられまし 清重

雑

前句は「住家はちかき一むらのかけ」である。村の片陰に住む人か。村で飼う鶏の声で、明け方の時をはかる。

④ 又ねはかなききぬくの跡 正重

雑 恋の句 「暁トアラバ・衣々」「鳥トアラバ・暁」

「衣々」も「又ね」も恋の詞である（『連珠合璧集』）。鳥の声で別れた後、もう一度寝ようとするが、はかない夢をむすぶばかり。

⑤ ちぎりても宮つかふ身ははかられず 円清

雑 恋の句

「ちぎり」も恋の詞（同）。ここは、宮仕えの女房であろう。男が密かに通って来て契りを交わす。しかし周囲をごまかせるものではない。

⑥ 情のすゑをしたふあはれさ

空与

雑 恋の句

「なさけ」で恋の詞（同）。前句は女が主体だが、この句では男が主体になる。思いをかけた女だが、職のある身ではなかなか逢ってやれない。それでも、一度かけた情けをいつまでも慕う女があわれである。

⑦ とり出てみるにあかぬはふみなれや 良乗

雑 恋の句

「文」が恋の詞になる（同）。恋の句が四句続いている。女からの文であろう。こちらを慕う思いが切々と述べられている。あわれを感じて、取り出しては飽きることなく読んでしまう。

⑧ かしこきはたゞいにしへの人

江青

ここで、恋の句から離れる。前句の「ふみ」は古い文書、漢籍などになる。賢い先達の遺した古典の書はいつ読んでも飽くことがない。

㊟みよし野や誰うへをきし花ならし 真斎

春(花) 花の句

花また花の吉野山。これはいったい、誰が植えたものであろう。初めて花を植えた人は賢いものだ、といにしえの人が慕われる。

㊟かはらぬ春に來なくうぐひす 紹印

春 「鶯トアラバ・・花の宿」

年々歳々春はやって来る。花は咲き鶯は鳴く。前句に付くと吉野の風景になるが、平和な春を言祝ぐ挙句は、福岡の地の将来を謳う。

以上が、百韻中四十四句の注解である。私は連歌の専門家ではなく、多くの作品をみてきたわけではない。この一巻の出来不出来は、判断しかねる。また、輪廻や去嫌の式目にはこだわらずに付合の運びを見た。

表八句は、黒田家一門が領地と家(城)を言祝いで付合を進めていると思われる。その後、連歌師紹印や実右の付合では、見事な展開がある。㊟の旅人から㊟の獵師、そして㊟鷹狩りといった変化は連歌の醍醐味であろう。また名ウの恋も平凡な詠みぶりではあるが、一巻のクライマックスを飾っている。

この連歌は、黒田家一族の門出を記念する一巻であったといえるだろう。

参考文献

特別展図録『軍師 官兵衛』(NHKプロモーション編 二〇一四年)

黒田官兵衛と連歌

『連歌辞典』（廣木一人編 二〇一〇年 東京堂出版）

『連歌の心と会席』（廣木一人編 二〇〇六年 風間書房）

棚町知弥「黒田如水の連歌」（『近世文芸 資料と考証』五 一九六六年）

棚町知弥「福城松連歌」（『近世文芸 資料と考証』四 一九六五年）

本稿を成すあたり、柿衛文庫館長の今井美紀氏、福岡市博物館学芸員の高山英朗氏には、多くのご教示を賜りました。心よりお礼申し上げます。

Kanbê Kuroda and his Renga

Shizuko TOMITA

In the Harima region, Kanbê Kuroda attracted attention last year. He was the protagonist of NHK drama. Kanbê supported Hideyoshi Toyotomi and founded the Kuroda clan in Kyushu. He was famous for competence to conduct wars. But otherwise little is known about Kanbê. Although Kanbê was always involved in wars, He was interested in literature and art. It is well known that samurais favored the tea seremony those days. However, few people know the samurais who favored Renga.

Kanbê Kuroda was interested in both the tea seremony and Renga. He participated in Renga party, patronized the Renga poet, and built a Renga school. In this paper, I introduce the Rengas which Kanbê Kuroda created with his family after building a castle in Fukuoka. Furthermore, I interpreted some part of them. He determined the name "Fukuoka" and wished for peace of their new territory, dedicating the Rengas to Dazaifu Tenmangu.